

多元化する社会の中の家族

宇田川 妙子 国立民族学博物館 准教授

[講演の概要]

現在、特に先進諸国においては、離婚・再婚の増加、シングルや同性愛者婚、PACSなど、家族の形態が多様化しつつあるといわれるが、こうした家族の多様化は、同時に、家族の社会における位置づけや意味が多様化していることも意味していると考えられる。その背景には、たとえば、高齢化によって人の一生がかつてないほどに延びると同時にライフスタイルが変化していること、グローバル化や高度情報化とともに人々の移動が急激に増えていることなど、様々な要因がある。すなわち私たちの生活は、いっそう多様な世代や人々とのかかわりが増え多元化が進みつつあるのであり、その中で必然的に家族の意味も変化しているのである。

今回は、そうした家族の現状の一端を紹介するために、イタリアの事例を取り上げる。イタリアは日本と同様に少子化や晩婚化が進んでおり、高齢者ケアなどの社会福祉も家族に依存してきたといわれる。また、人々の家族への関心・愛着が非常に強い社会でもある。

しかし近年、国家が福祉施策における市民セクターの重要性をあらためて打ち出したように、家族以外の社会的な領域への関心や依存が高まっており、実際、その活動は非常に盛んになりつつある。そこには、人々のライフスタイルの変化、高齢化・少子化、移民の増大（そして国家の財政難も）などの要因が絡んでいる。このことは、一律に家族の重要性の低下とは言えず、むしろ、これまでどおりの家族を維持するための動きであるとも見ることができる。とはいえその過程で、高齢単身者世帯の増加、離婚の増加、家族のみならず親族関係の重視、外国人（移民）との結婚の増加などの現象も起きており、彼らの家族は、やはりその形や機能・意味を変えつつある。イタリアの多元化する社会状況の中で、彼らがいかに家族という問題に向き合っているか、考えてみたい。

[プロフィール]

東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専門課程博士課程単位取得後退学、東京大学教養学部助手、中部大学国際関係学部講師・助教授、金沢大学文学部助教授を経て、2004年より現職。専門は、イタリアを中心とする南ヨーロッパ地域にかんする文化人類学的研究。中でも家族やジェンダー問題を主たる研究テーマとしている。編著に『ジェンダー人類学を読む：地域別・テーマ別基本文献レビュー』（世界思想社、2007）